

## 古代語形容詞の階層構造

村田 菜穂子\*

### Layered Structure of Adjectives of Old Japanese

Nahoko MURATA\*

#### Abstract

This article discusses hierarchical structures of adjectives of Old Japanese from the viewpoint of uniting types set for the structural analysis of words. The examination shows that, when viewed from the development process, the Old Japanese adjectives consist of three different evolution stages: the first-, the second-, and the third-stage adjectives. From the uniting type, the developmental stages of Old Japanese adjectives are as follows: as for ku-inflection adjectives, the second-stage type increases, while the number of the first-stage type adjective decreases down into the third type; among siku-inflection adjectives, the first-stage type is on the rise even if it is a new adjective, while the second and the third type does not reach the level of ku-inflection adjectives. The finding from these data is: the adjectival development differs depending on the type of inflection.

#### キーワード

古代語形容詞、階層構造、第一次形容詞、第二次形容詞、第三次形容詞

---

\*むらた なほこ：大阪国際大学短期大学部家政科講師〈2002 11.18受理〉

## 古代語形容詞の階層構造

村田 菜穂子

### 一 はじめに

これまで、前稿①「上代形容詞の語構成」<sup>〔注1〕</sup>・前稿②「八代集の形容詞―語構成論的考察」<sup>〔注2〕</sup>において、語構成論的な観点からそれぞれの形容詞についての分析を試み、前稿③「八代集の形容詞―語彙の計量的考察」<sup>〔注3〕</sup>においては、八代集で使用された形容詞の量的な側面について調査・考察を行ってきた。そして、これらを承け、前稿④「古代語形容詞の語構成」<sup>〔注4〕</sup>では、上代資料・八代集の二資料から採取された形容詞の語構成を見直すとともに、中古散文作品<sup>〔注5〕</sup>を加えて、三資料から採取された形容詞の語構成を分析してその記述を試みた。さらに、前稿④を古代語形容詞の語構成分析の基本資料として、前稿⑤「中古散文の形容詞―語彙の数量的分析」<sup>〔注6〕</sup>では、中古散文作品で使用された形容詞の量的な側面について観察し、また、前稿⑥「古代語形容詞の造語形式―中古散文の形容詞を中心に」<sup>〔注7〕</sup>では、語構成論の一つの柱である造語論的な観点からの分析・考察を行い、さらに、近稿①「古代語形容詞の語構成分析についての一考察」<sup>〔注8〕</sup>ならびに近稿②「語構成から見た古代語形容詞―二つの系列」<sup>〔注9〕</sup>

では、語構成論のもう一つの柱である語構成論的な観点からの分析・考察を行った。

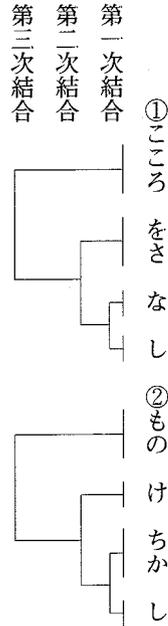
本稿では、語構成分析のために設定した結合タイプ<sup>〔注10〕</sup>という観点から古代語形容詞を観察し、古代語形容詞の階層的な構造の実態を考察した結果を報告する。なお、語構成論的な分析ならびに造語論的な分析の方法については、すでに述べた(前稿④)ことがあるが、本稿で取り上げる語構成論的な分析と記述の方法については、改めて要点のみを簡潔に述べておく。

### 二 結合の階層性

三資料から採取された古代語形容詞には三七種類の結合タイプが存在する<sup>〔注11〕</sup>。例えば、「こころ／をさ／な／し・もの／け／ぢか／し」という形容詞は、四つの語構成要素(四単位)から成る語であるが、語構成要素の違いによって結合タイプが異なる。

- ① こころをさなし：W(4)Ⅱ「タ＋「タ＋(コトセ)Ⅰ」  
 ② ものけちかし：W(4)Ⅱ「セ＋「セ＋(ゴトセ)Ⅰ」  
 もっとも、各語構成要素の結合の在り方、すなわち階層性は

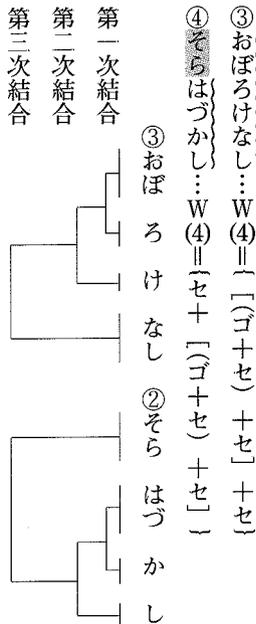
等しく、第三項と第四項が第一次結合を行った後、それに第二項が結合し(第二次結合)、さらに第三項が結合して(第三次結合)、「ところをさなし・ものけちかし」が成立している。



これを発生的な観点から捉え直すと、①②の形容詞は、いずれも波線を施した第一次結合部分においてまずはじめに形容詞「なし・ちかし」を構成し(第一次形容詞)、そして、その第一次形容詞に第二項(網掛けをした語構成要素)が上接して新たな形容詞「をさなし・けちかし」を構成し(第二次形容詞)、さらにその第二次形容詞に「ところ・もの」といった語構成要素が上接して第三次形容詞「ところをさなし・ものけちかし」が成立しているという経路を想定することができる。つまり、①②の形容詞は、第一次形容詞から二段階の過程を経た第三次形容詞という点で括ることができる。

- ① 第一次形容詞… なし／
- 第二次形容詞… をさなし／
- 第三次形容詞… ところをさなし／ものけちかし
- ② 第一次形容詞… ちかし
- 第二次形容詞… をさなし／
- 第三次形容詞… けちかし

一方、同じ四単位語の形容詞であっても、「おぼろ／け／なし・そら／はづ／か／し」などの形容詞が成立に至る経路は①や②の形容詞とは全く異なっている。

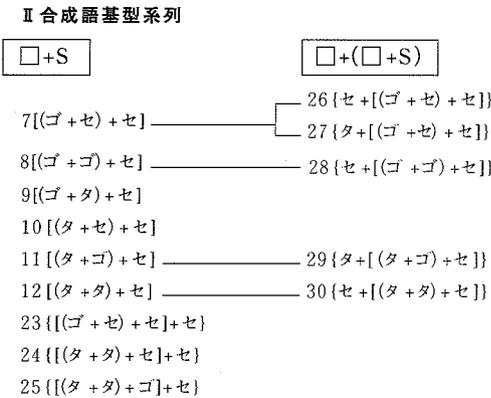
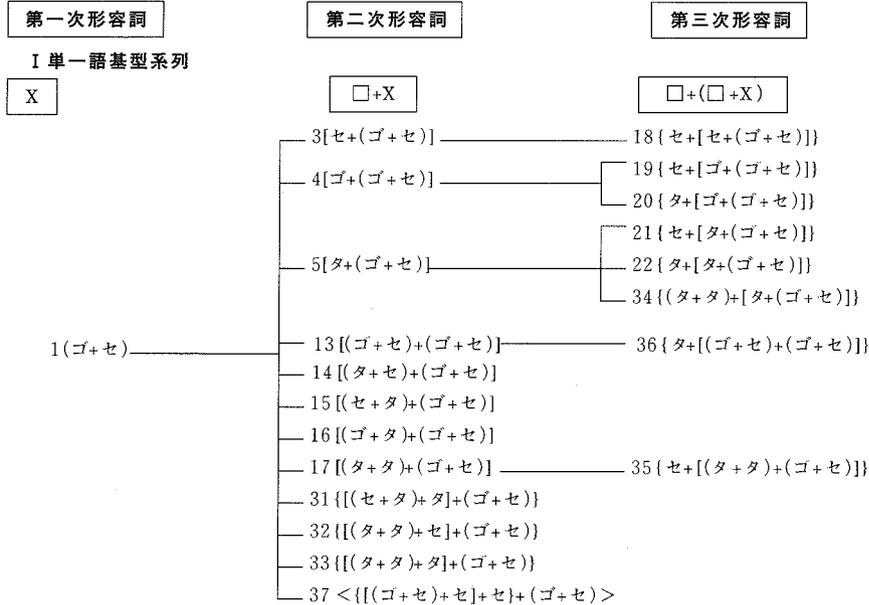


- ③ おぼろけなし… W(4) || 「ゴ+セ」+セ」+セ」
- ④ そらはづかし… W(4) || 「セ+」+「ゴ+セ」+セ」+
- ③ おぼろけなし／
- ④ そらはづかし

③は、①②と同様に三段階の結合を経ているものの、形容詞としての成立は第三次結合を経た時点であり、第三次結合以前の形容詞形が存在しないということで、形容詞としては第一次形容詞ということになる。また、④は、同じく三段階の結合を経ている形容詞であるが、形容詞としての成立は第二次結合を経た時点の「はづかし」であり、第二次結合以前の形容詞形が存在しないということで「そらはづかし」は第二次形容詞ということになる。

このように、発生的な観点から結合タイプを捉え直し、形容詞の発達段階によって古代語形容詞を分類すると、まずはじめ

結合タイプの階層構造図



めに、形容詞として成立した第一番目の語形である第一次形容詞が存在し、次に、第一次形容詞から形成された第二次形容詞、さらに第二次形容詞から形成された第三次形容詞という三段階に分類して捉えることができる。

そして、近稿②<sup>〔註〕</sup>で述べたように、古代語形容詞には、I 単一語基型「ゴ+セ・タ+セ(X)」を出発点とする系列と、II 合成語基型「(ゴ+セ) +セ」や「(ゴ+ゴ) +セ」など「□+セ」を出発点とする系列という二つの系列があり、これらと結合タイプの階層性とを合せて古代語形容詞の全体構造を捉え直す図のようになる。

三 結果と考察

(一)

では、この第一次形容詞・第二次形容詞・第三次形容詞が各資料でどのような使用状況にあるかを見ておくことにする。

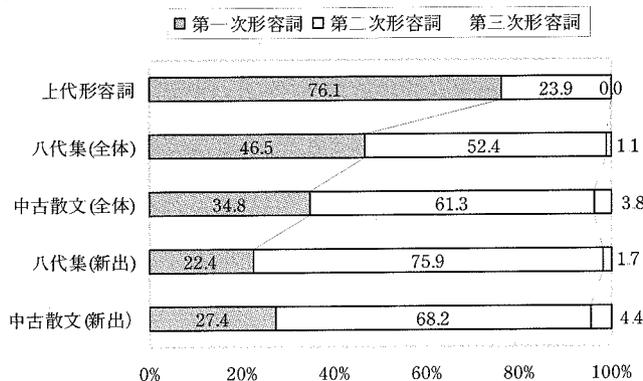
表1を見ると、上代形容詞では第一次形容詞の割合が76.1%で最も高く、第二次形容詞が23.9%でこれに次いでいる。一方、八代集の形容詞(全体)では第二次形容詞の割合が52.4%で最も高く、そして、第一次形容詞が46.5%でこれに次ぎ、また、中古散文の形容詞(全体)でも第二次形容詞の割合が61.3%で最も高く、第一次形容詞が34.8%でこれに次いでいる。つまり、上代形容詞と中古の二資料で使用された形容詞とでは第一次形容詞・第二次形容詞の割合が逆転している状況がうかがえる。ただし、八代集(全体)では、中古散文(全体)と比べて第一次形容詞の割合が高くなっている。これは、八代集(全体)に占める既存の形容詞(上代形容詞)の割合が高くなっているために、上代形容詞の特質を受け継ぐ方向に傾く(注3)からであり、新出の形容詞(注4)だけを取り出してみた場合には、第二次形容詞の割合は八代集(新出)よりも中古散文(新出)の方が低く、むしろ第一次形容詞の割合は中古散文(新出)の方が高くなっている。

表1

資料	単位数	八代集の形容詞		中古散文の形容詞	
		上代形容詞	(全体)	(新出)	(全体)
第一次形容詞	188 (76.1)	126 (46.5)	39 (22.4)	392 (34.8)	267 (27.4)
第二次形容詞	59 (23.9)	142 (52.4)	132 (75.9)	690 (61.3)	666 (68.2)
第三次形容詞	0	3 (1.1)	3 (1.7)	43 (3.8)	43 (4.4)
合計	247 (100.0)	271 (100.0)	174 (100.0)	1125 (100.0)	976 (100.0)

( ) はパーセントを表す。以下同じ。

グラフ1



古代語形容詞の階層構造

また、第三次形容詞は、中古散文に四三語、八代集に三語存在する。これらの語はすべて上代資料には認められない中古の新出形容詞で、しかもその割合は極低い割合でしかない。これは、第三次形容詞というものが第一次形容詞から二段階の過程を経た形容詞であり、その成立は第二次形容詞に続くものであるから、おそらく、成立時の状況は、第一次形容詞が活発に生産されていた時代というよりも第二次形容詞の隆盛期、乃至はそれ以降の、ある程度時代が下ってからのことであろうことが考えられる。しかも、第三次形容詞は、第一次形容詞や第二次形容詞と比べて当然高次な結合であるものが多く、長単位語化して一語の音節数が多くなっていることから、それが文献に残るには音節数に制約がない資料であることが条件になる可能性が高く、八代集では多音節語を自由に使用しにくかったことが考えられる。

以上のような事情から、第三次形容詞が、上代形容詞には存在しないこと、また、八代集の形容詞にもわずか三語しか使用されず中古散文の形容詞以上に全体に占める割合が低いことは、成立の過程等を鑑みれば当然の結果であるという解釈ができよう。

さらに、これを活用別に見てみたものが次の表2・1・グラフ2・1(ク活用)と表2・2・グラフ2・2(シク活用)である。

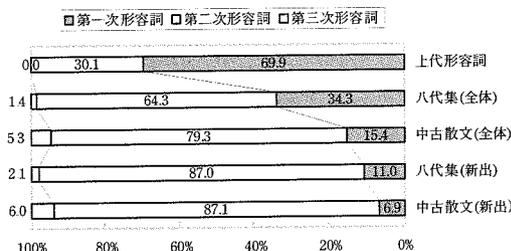
表2-1(ク活用)

資料 \ 単位数	上代形容詞	八代集の形容詞		中古散文の形容詞	
		(全体)	(新出)	(全体)	(新出)
第一次形容詞	93 (66.9)	72 (34.3)	16 (11.0)	114 (15.4)	45 (6.9)
第二次形容詞	40 (30.1)	135 (64.3)	127 (87.0)	585 (79.3)	566 (87.1)
第三次形容詞	0	3 (1.4)	3 (2.1)	39 (5.3)	39 (6.0)
合計	133 (100.0)	210 (100.0)	146 (100.0)	738 (100.0)	650 (100.0)

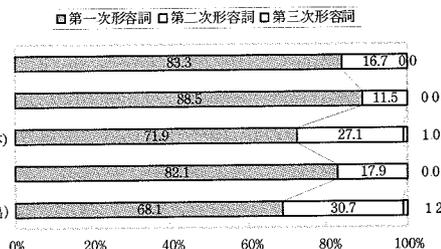
表2-2(シク活用)

資料 \ 単位数	上代形容詞	八代集の形容詞		中古散文の形容詞	
		(全体)	(新出)	(全体)	(新出)
第一次形容詞	95 (83.3)	54 (88.5)	23 (82.1)	278 (71.9)	222 (68.1)
第二次形容詞	19 (16.7)	7 (11.5)	5 (17.9)	105 (27.1)	100 (30.7)
第三次形容詞	0	0	0	4 (1.0)	4 (1.2)
合計	114 (100.0)	61 (100.0)	28 (100.0)	387 (100.0)	326 (100.0)

グラフ2-1 (ク活用)



グラフ2-2 (シク活用)



グラフ2-1およびグラフ2-2を見ると、第一次形容詞・第二次形容詞・第三次形容詞の使用状況(割合)は活用の違いによってかなり違っている状況が見てとれる。中でも、上代形容詞は、他の二資料の形容詞と比べて活用の違いによる差違はそれほど大きいものではないが、八代集および中古散文の形容詞(全体)では、活用の違いによって第一次形容詞・第二次形容詞・第三次形容詞の割合は大きく違っている。

まず、ク活用形容詞の方を見ると、上代形容詞において、最も高い割合を占めているのは第一次形容詞の69.9%である。一方、八代集・中古散文(全体)ではともに第二次形容詞の割合が高く、八代集(全体)で64.3%、中古散文(全体)で79.3%という高い割合を占めており、第一次形容詞の割合は、

八代集(全体)で34.3%、中古散文(全体)では15.4%にとどまっている。また、新出の形容詞について見ると、第二次形容詞の割合はさらに高くなり、両資料ともに87%にも達し、その一方で、第一次形容詞の割合は一層低くなって、一割程度乃至はそれ以下にとどまっている。こうした状況を見ると、ク活用形容詞については、上代では第一次形容詞が主流であったが、中古の新出形容詞においては、第一次形容詞の生産はもはや下火になり奮わず、対照的に、第二次形容詞の生産が著しく活発で、これが新出形容詞の中心的存在となっている状況がうかがえる。

一方のシク活用形容詞の方は、すべての資料において第一次形容詞の割合が断然高く、中古の新出形容詞においても、中心的存在は上代と変わらず第一次形容詞であることがわかる。また、八代集ではシク活用形容詞の語数が少ないため判断が下しにくいですが、中古散文のシク活用形容詞について言えば、第一次形容詞を主流とする中、第二次形容詞の割合が新出の形容詞でやや高くなりつつあり、ク活用形容詞との対応を考えると、シク活用形容詞の場合も今後第二次形容詞の生産が活発になる可能性は肯定的に見ておいてもよいかと思われる。

以上、結合タイプから語形成の階層構造をたどりながら、古代語形容詞の発達過程を考察した。その結果、結合タイプから見た形容詞の発達段階は、活用によって明らかに遅早があるとこの状況が認められた。すなわち、ク活用形容詞については第

古代語形容詞の階層構造

二次形容詞が主流となりつつある一方、第一次形容詞の生産はもはや下火になりつつあり、さらには、第三次形容詞の段階にまで達しているのに対して、シク活用形容詞の方は、新出の形容詞でも主流は第一次形容詞であり、第二次形容詞および第三次形容詞の生産はク活用形容詞のレベルには達していない状況が認められ、このことから、ク活用形容詞の方がシク活用形容詞よりも進んでいる状況にあるという結果が得られた。

(二)

次に、この階層構造からの分類に基づいて、それぞれ階層性の異なる形容詞が資料毎にどのような比率で使用されているかを対比してみたい。なお、以下の考察においては、活用の違いに配慮してク活用形容詞とシク活用形容詞とを区別して分析を進めることにする。

八代集の形容詞

以下に示した表3・1(ク活用)・表3・2(シク活用)は、八代集の各作品に使用された総形容詞異なり語数に対する第一次形容詞・第二次形容詞および第三次形容詞の異なり語数とその比率(割合)を対比したものであり、グラフ3・1(ク活

表3-1 階層構造から見た八代集のク活用形容詞(異なり語数)

分類	八代集		語数	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古今
	異なり語数	比率(%)									
第一次形容詞	72	34.4	語数 47 比率(%) 47.5	47	45	51	52	38	30	38	47
第二次形容詞	135	64.3	語数 51 比率(%) 51.5	51	50	51	48	33	18	36	48
第三次形容詞	3	1.4	語数 1 比率(%) 1.0	1	1	2	0	0	0	1	0
合計	210	100.0	語数 99	99	96	104	100	71	48	75	95

表3-2 階層構造から見た八代集のシク活用形容詞(異なり語数)

分類	八代集		語数	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古今
	異なり語数	比率(%)									
第一次形容詞	54	88.5	語数 27 比率(%) 90.0	27	28	34	31	24	19	26	23
第二次形容詞	7	11.5	語数 3 比率(%) 10.0	3	0	2	1	2	0	0	1
合計	61	100.0	語数 30	30	28	36	32	26	19	26	24

用)・グラフ3・2(シク活用)はそれをグラフ化したものである。そして、表4・1(ク活用)・表4・2(シク活用)および、グラフ4・1(ク活用)・グラフ4・2(シク活用)は、同じく、延べ語数とその使用率を対比したものである。

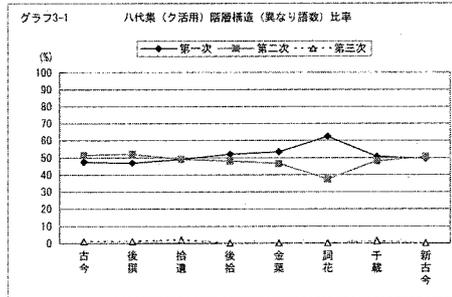
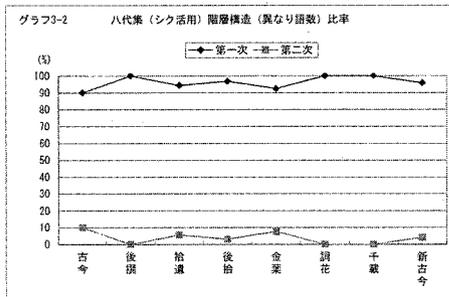
国際研究論叢

表4-1 階層構造から見た八代集のク活用形容詞（延べ語数）

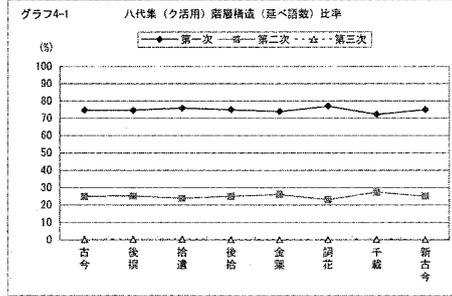
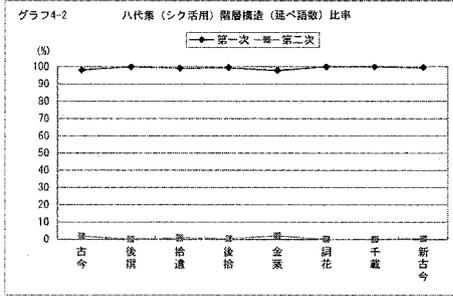
分類	八代集			古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古今
	延べ語数	比率(%)									
第一次形容詞	2372	74.7	語数	296	427	392	294	170	87	261	445
			比率(%)	74.7	74.7	75.8	75.0	73.9	77.0	72.3	74.9
第二次形容詞	798	25.1	語数	99	144	123	98	60	26	99	149
			比率(%)	25.0	25.2	23.8	25.0	26.1	23.0	27.4	25.1
第三次形容詞	5	0.2	語数	1	1	2	0	0	0	1	0
			比率(%)	0.3	0.2	0.4	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0
合計	3175	100.0	語数	396	572	517	392	230	113	361	594

表4-2 階層構造から見た八代集のシク活用形容詞（延べ語数）

分類	八代集			古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古今
	延べ語数	比率(%)									
第一次形容詞	1287	99.3	語数	158	214	228	188	94	61	158	186
			比率(%)	98.1	100.0	99.1	99.5	97.9	100.0	100.0	99.5
第二次形容詞	9	0.7	語数	3	0	2	1	2	0	0	1
			比率(%)	1.9	0.0	0.9	0.5	2.1	0.0	0.0	0.5
合計	1296	100.0	語数	161	214	230	189	96	61	158	187



古代語形容詞の階層構造



異なり語数（グラフ3・1・3・2）から見た場合、八代集の各作品に使用されたク活用形容詞は、既存の形容詞の割合が『詞花』でやや高くなっているものの、作品の推定成立年代に関わらず、第一次形容詞と第二次形容詞とはほぼ同程度で拮抗している。これに対して、同シク活用形容詞の方は、そのほとんどが第一次形容詞で占められ、第二次形容詞の割合は極めて低い。『後撰』『詞花』『千載』に至っては全く第二次形容詞が使用されておらず、これらの三作品で使用されたシク活用形容詞はすべて第一次形容詞に限られている。

次に、延べ語数（グラフ4・1・4・2）から見た場合には、ク活用形容詞は、すべての作品で第一次形容詞が75%程度、そして、第二次形容詞が25%程度と、ほぼ一定した使用率にあり、第一次形容詞が第二次形容詞を完全に上回っている。つまり、ク活用形容詞は、八代集の各作品では、異なり語数という語の種類（質的構成）から見た場合には、第一次形容詞と第二次形容詞とがおおよそ同程度であるのに対して、延べ語数という使用頻度（量的構成）から見た場合には、第二次形容詞よりも第一次形容詞の方を多数使用していることがわかる。他方、シク活用形容詞については、先にも述べたように、第二次形容詞が採取されなかった作品があるだけでなく、第二次形容詞はすべて使用頻度一の語であることから、第一次形容詞と第二次形容詞との比率差は異なり語数で見た場合よりもさらに大きくなっ

ている。これを見る限りでは、八代集においてシク活用の第一次形容詞は非常に影の薄い存在であることがうかがえる。

なお、第三次形容詞は、『古今』『後撰』『拾遺』『千載』において、ク活用形容詞に限って認められるものであり、異なり語数としてはわずかに三語（あとはかなし・こころをさなし・おもひぐまなし）にすぎず、また、その使用頻度も一乃至は二にとどまるものである。

中古散文の形容詞

以下に示した表5・1（ク活用）・表5・2（シク活用）は、中古散文作品に使用された総形容詞異なり語数に対する第一次形容詞・第二次形容詞および第三次形容詞の異なり語数とその比率（割合）を対比したものであり、グラフ5・1（ク活用）・グラフ5・2（シク活用）はそれをグラフ化したものである。そして、表6・1（ク活用）・表6・2（シク活用）および、グラフ6・1（ク活用）・グラフ6・2（シク活用）は、同じく、延べ語数とその使用率を対比したものである。

表5-1 階層構造から見た中古散文のク活用形容詞（異なり語数）

分類	散文22作品			竹取	土佐	伊勢	平中	大和	多武峯	篁	宇津保	蜻蛉	落窪	和泉
	異なり語数	比率(%)												
第一次形容詞	114	15.4	語数	29	30	39	29	49	17	17	89	64	65	28
			比率(%)	46.0	66.7	53.4	61.7	57.6	47.2	51.5	29.9	40.0	42.5	35.9
第二次形容詞	585	79.3	語数	32	14	32	15	35	18	15	202	93	86	46
			比率(%)	50.8	31.1	43.8	31.9	41.2	50.0	45.5	67.8	58.1	56.2	59.0
第三次形容詞	39	5.3	語数	2	1	2	3	1	1	1	7	3	2	4
			比率(%)	3.2	2.2	2.7	6.4	1.2	2.8	3.0	2.3	1.9	1.3	5.1
合計	738	100.0	語数	63	45	73	47	85	36	33	298	160	153	78
分類	散文22作品			枕	源氏	紫式部	堤	寝覚	浜松	更級	狭衣	大鏡	讃岐	とりかへ
	異なり語数	比率(%)												
第一次形容詞	114	15.4	語数	72	100	51	51	79	65	37	69	63	36	62
			比率(%)	45.9	20.6	44.0	44.7	30.5	39.4	42.5	29.5	43.4	46.8	29.1
第二次形容詞	585	79.3	語数	82	360	63	59	171	92	47	156	78	39	145
			比率(%)	52.2	74.1	54.3	51.8	66.0	55.8	54.0	66.7	53.8	50.6	68.1
第三次形容詞	39	5.3	語数	3	26	2	4	9	8	3	9	4	2	6
			比率(%)	1.9	5.3	1.7	3.5	3.5	4.8	3.4	3.8	2.8	2.6	2.8
合計	738	100.0	語数	157	486	116	114	259	165	87	234	145	77	213

古代語形容詞の階層構造

表5-2 階層構造から見た中古散文のシク活用形容詞 (異なり語数)

分類	散文22作品			竹取	土佐	伊勢	平中	大和	多武峯	篁	宇津保	蜻蛉	落窪	和泉
	異なり語数	比率(%)												
第一次形容詞	278	71.8	語数	31	19	30	32	37	21	16	120	83	92	39
			比率(%)	88.6	95.0	90.9	88.9	90.2	91.3	84.2	83.3	86.5	88.5	83.0
第二次形容詞	105	27.1	語数	4	1	3	4	4	2	3	23	13	12	8
			比率(%)	11.4	5.0	9.1	11.1	9.8	8.7	15.8	16.0	13.5	11.5	17.0
第三次形容詞	4	1.0	語数	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
			比率(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0
合計	387	100.0	語数	35	20	33	36	41	23	19	144	96	104	47
分類	散文22作品			枕	源氏	紫式部	堤	寢覚	浜松	更級	狭衣	大鏡	讃岐	とりかへ
	異なり語数	比率(%)												
第一次形容詞	278	71.8	語数	97	210	78	65	138	113	52	131	86	41	122
			比率(%)	89.0	76.4	90.7	90.3	84.1	83.1	81.3	81.9	86.9	87.2	85.3
第二次形容詞	105	27.1	語数	12	62	8	7	26	22	12	29	13	6	20
			比率(%)	11.0	22.5	9.3	9.7	15.9	16.2	18.8	18.1	13.1	12.8	14.0
第三次形容詞	4	1.0	語数	0	3	0	0	0	1	0	0	0	0	1
			比率(%)	0.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7
合計	387	100.0	語数	109	275	86	72	164	136	64	160	99	47	143

表6-1 階層構造から見た中古散文のク活用形容詞 (延べ語数)

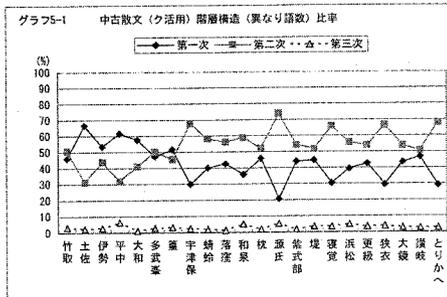
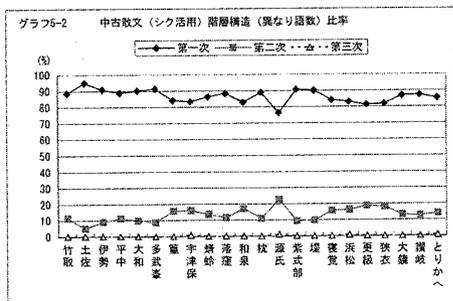
分類	散文22作品			竹取	土佐	伊勢	平中	大和	多武峯	篁	宇津保	蜻蛉	落窪	和泉
	延べ語数	比率(%)												
第一次形容詞	22949	61.3	語数	126	96	151	134	271	59	37	3869	716	827	143
			比率(%)	68.1	76.2	68.6	71.1	67.8	69.4	63.8	67.7	66.2	65.2	57.4
第二次形容詞	14045	37.5	語数	57	28	67	48	126	25	16	1823	347	427	99
			比率(%)	30.8	22.2	30.5	25.7	31.5	29.4	27.6	31.9	32.1	33.7	39.8
第三次形容詞	453	1.2	語数	2	2	2	5	3	1	5	21	19	14	7
			比率(%)	1.1	1.6	0.9	2.7	0.8	1.2	8.6	0.4	1.8	1.1	2.8
合計	37447	100.0	語数	185	126	220	187	400	85	58	5713	1082	1268	249
分類	散文22作品			枕	源氏	紫式部	堤	寢覚	浜松	更級	狭衣	大鏡	讃岐	とりかへ
	延べ語数	比率(%)												
第一次形容詞	22949	61.3	語数	1492	7270	289	263	2429	1168	198	1667	613	182	949
			比率(%)	77.7	55.2	66.1	62.0	65.8	59.0	60.6	57.9	67.8	64.3	51.3
第二次形容詞	14045	37.5	語数	424	5684	146	154	1219	783	125	1182	287	99	879
			比率(%)	22.1	43.1	33.4	36.3	33.0	39.6	38.2	41.0	31.7	35.0	47.5
第三次形容詞	453	1.2	語数	5	223	2	7	43	28	4	31	4	2	23
			比率(%)	0.3	1.7	0.5	1.7	1.2	1.4	1.2	1.1	0.4	0.7	1.2
合計	37447	100.0	語数	1921	13177	437	424	3691	1979	327	2880	904	283	1851

表6-2 階層構造から見た中古散文のシク活用形容詞（延べ語数）

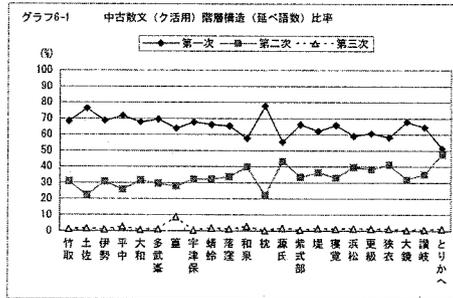
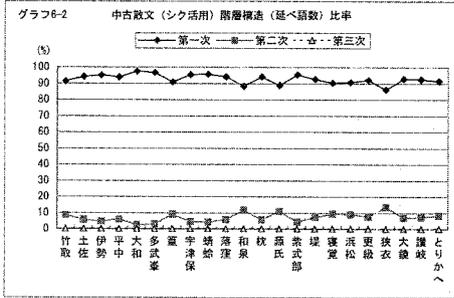
分類	散文22作品			竹取	土佐	伊勢	平中	大和	多武峯	篁	宇津保	蜻蛉	落窪	和泉
	延べ語数	比率(%)												
第一次形容詞	23495	91.1	語数	85	49	80	124	278	62	30	3164	650	969	167
			比率(%)	91.4	94.2	95.2	93.9	97.5	96.9	90.9	95.5	95.7	94.1	88.4
第二次形容詞	2275	8.8	語数	8	3	4	8	7	2	3	149	29	61	22
			比率(%)	8.6	5.8	4.8	6.1	2.5	3.1	9.1	4.5	4.3	5.9	11.6
第三次形容詞	7	0.0	語数	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
			比率(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	25777	100.0	語数	93	52	84	132	285	64	33	3314	679	1030	189

分類	散文22作品			枕	源氏	紫式部	堤	寢覚	浜松	更級	狭衣	大鏡	讃岐	とりかへ
	延べ語数	比率(%)												
第一次形容詞	23495	91.1	語数	1511	8134	278	303	1914	1347	238	1921	684	162	1345
			比率(%)	94.2	89.0	95.5	92.7	90.5	90.8	92.2	86.4	92.9	92.6	91.6
第二次形容詞	2275	8.8	語数	93	1001	13	24	202	135	20	303	52	13	123
			比率(%)	5.8	11.0	4.5	7.3	9.5	9.1	7.8	13.6	7.1	7.4	8.4
第三次形容詞	7	0.0	語数	0	4	0	0	0	1	0	0	0	0	1
			比率(%)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計	25777	100.0	語数	1604	9139	291	327	2116	1483	258	2224	736	175	1469



古代語形容詞の階層構造



異なり語数(グラフ5・1・5・2)から見た場合、中古散文の各作品に使用されたク活用形容詞は、『土佐』『伊勢』『平中』『大和』『箕』といった古い作品では、第一次形容詞がク活用形容詞全体の二分の一を超えているが、その他の作品では、第二次形容詞が半数以上を占めている。とりわけ、『宇津保』『源氏』『寝覚』『狭衣』『とりかへ』では、第二次形容詞の割合が高く、それぞれの作品で使用されたク活用形容詞全体の三分の一を超えている。

これら五作品に共通する点は、いずれもが長編である、言い換えると、作品の規模が大きく語彙量が多いという点である。これに対して、『宇津保』以後の、『堤』のような短編物語集や『讀岐』等のような短編の日記においては、第二次形容詞の割合は前掲の五作品ほど高いものではなく、第一次形容詞と第二次形容詞との比率差は小さくなっている。この点に関しては、語彙の一般的な量的特性——「複合語は、異なり語においては、語彙の規模が大きくなるにつれてその比率を高めるが、使用率から見ればほぼ一定」(注5)という点を含めて考えてみる必要がある。確かに、使用率(延べ語数)から見た場合、第二次形容詞の比率は、『宇津保』以後の(前に挙げた長編の五作品も他の作品とあまり差がなく、ほぼ一定している(注6)。要するに、中古散文のク活用形容詞については、語の種類から見た場合には、『宇津保』以後の作品において、第一次形容詞の割合よりも第二次形容詞の割合が高く、一方、これよりも前の古い作品

では様相が異なり、第一次形容詞の割合の方が高いか、あるいは同程度であるという、質的構成に変化が生じている。

これに対して、同シク活用形容詞の方は、すべての作品で第一次形容詞が第二次形容詞を大幅に上回っている。そして、両者の比率差はほぼ一定しており、唯一『源氏』の第二次形容詞だけが二割を超えているが、それ以外の作品では、第一次形容詞がおよそ八割から九割、第二次形容詞がおよそ一割から二割の間で推移し、作品の推定成立年代やその規模の違いによるばらつきがほとんどない状況がうかがえる。

次に、延べ語数(グラフ6・1・6・2)から見た場合には、ク活用形容詞についても、すべての作品で第一次形容詞が第二次形容詞を上回っている。つまり、異なり語数で見たような第一次形容詞と第二次形容詞とが逆転するという質的構成の変化が、延べ語数、すなわち使用頻度という量的構成にまで影響を及ぼすには至っていない状況が見てとれる。この他、『土佐』および『枕』で、他の作品と比べて一割程度第一次形容詞の使用率が高くなっていることが注意されるが、この点については改めて考えることにしたい。

また、シク活用形容詞の方は、異なり語数で見た場合よりも第一次形容詞と第二次形容詞との比率差が少し大きくなり、いずれの作品でも九割前後を第一次形容詞が占めるようになる。そして、使用頻度という量的側面においては、八代集と中古散

文学作品との差違がほとんど無くなり、中古の韻文や散文に用いられているシク活用形容詞は専ら第一次形容詞であるという共通点が認められる。なお、中古散文学作品においては、ク活用・シク活用の両方に第三次形容詞が存在しているが、八代集と同様、中古散文学作品で使用された形容詞に占める第三次形容詞の比率(異なり語数・延べ語数ともに)は極めて低いものでしかない。

以上見てきたように、中古散文学作品に使用されたク活用形容詞については、『篁』以前の作品と『宇津保』以後の作品との間に、第一次形容詞と第二次形容詞の割合(異なり語数)がおおよそ逆転というに近い質的構成の変化が認められた。しかし、この変化は、質、すなわち体系的側面の新旧交替という域にとどまるものであり、使用頻度(延べ語数)という量的構成の域には及んでいないという実態が明らかになった。これに対して、シク活用形容詞の方は、すべての作品で、質(異なり語数・量(延べ語数)いずれにおいても、その大半が第一次形容詞であり、第二次形容詞であるところの『複合形容詞』による自己増殖は盛んではない状況が認められるのである。

【付記】

本稿は、日本学術振興会平成13・15年度科学研究費(基盤研究(C)・課題番号13610495)による研究成果の一部である。

- 注1 『国語彙史の研究』20 (和泉書院、2001・3)
- 注2 『帝塚山学院大学日本文学研究』32 (2001・2)
- 注3 『甲南国文』48 (2001・3)
- 注4 『大阪国際女子大学紀要』27・1 (2001・9)
- 注5 対象とした資料については、注4(前稿④)に挙げたので詳しくはそれに拠られたく、ここでは中古散文二三作品の作品名だけを挙げておく。『竹取物語』・『土佐日記』・『伊勢物語』・『平中物語』・『大和物語』・『多武峯少将物語』・『篁物語』・『宇津保物語』・『紫式部日記』・『落窪物語』・『和泉式部日記』・『枕草子』・『源氏物語』・『紫式部日記』・『堤中納言物語』・『夜の寝覚』・『浜松中納言物語』・『更級日記』・『狭衣物語』・『大鏡』・『讀岐典侍日記』・『とりかへばや物語』(なお、紙数の都合で略記する場合、下線部を略称とする。)
- 注6 『表現研究』74、(2001・10)
- 注7 『帝塚山学院大学日本文学研究』33 (2002・2)
- 注8 『国語彙史の研究』22 (2003・3)
- 注9 『帝塚山学院大学日本文学研究』34 (2003・2)
- 注10 語構造の記述に際して、まずはその前提となる部分要素(語構成要素)を、【語基】(実質的な意味を表し、語の意味の中核的な部分を担う)と【接辞】(語基と結合して、形式的・補助的な意味を表す)に大別して捉えるところから始め、形容詞を造り上げているこの語構成要素の結合のあり方(階層性)を整理し記述しようとしたものを「語構造」と呼び、そして、さらに【語基】をその独立性の違いから、単独で語を組み立てることができない結合形式の要素〈語基〉と単独で語を組み立てることができる自立形式の要素〈単語〉の二つに分けて、それぞれの形容詞の語構造を示し直したものを「結合タイプ」と呼んでいる。ただし、【接辞】は、【語基】に対する位置によって「接頭辞」と「接尾辞」とを区別することができるので、結合タイプを記述する際には「つ」にまごめて「セ」と記述し、〈語基〉は「ゴ」、〈単語〉「タ」と記述する。
- 注11 注4(前稿④)においては、三八種類の結合タイプを提示した。これは、「なまはらだちやすし」をへa「なまはらだつ十やすし」と捉えて、結合タイプを「セ十(タ十タ)十(ゴ十セ)」と記述していたことに拠る。しかし、その後、「なまはらだちやすし」の他にはこの結合タイプと見なされる形容詞がないこと、また、「源氏物語」(東屋)の例以外に「なまはらだつ」の例が見当たらないことを合せ考え、語構造的な孤例を認めることを避けて、へb「なまはらだちやすし」と捉える方が穏当であろうと判断した。その結果、「なまはらだちやすし」の結合タイプは、他に複数の形容詞が属する「セ十(タ十タ)十(ゴ十セ)十(ゴ十セ)」に含められ、「セ十(タ十タ)十(ゴ十セ)」が削除されて結合タイプは三七種類に改められることになった。もつとも、現時点ではへb「なまはらだちやすし」と捉えることにしたが、このように捉えるとしても「はらだちやすし」の語形が見出し得ていないという問題も残っており、今後の調査により、修正される余地のある語であることを断っておく。詳しくは、注9(近稿②)を参照されたい。
- 注12 注9(近稿②)では、語構造という観点から「系列」を説明したが、語構成要素を細分化したところの結合タイプから捉えた場合にも構造的に見て系列が二系統に分かれると捉えられることは本質的に変わらない。
- 注13 注3(前稿③)および注6(前稿⑤)参照。
- 注14 新出の形容詞とは、上代資料には認められない、中古の資料から採取された新しい形容詞を指す。
- 注15 田島鏡堂氏『比較語彙研究序説』(1999・10、笠間書院)「本章比較語彙研究のあらまし」参照。異なり語数から見た複合語と単純語との関係は、漢語と和語との関係と同じように、基本的な語ほど異なり語に占める割合は低くなる。
- 注16 注6(前稿⑤)のグラフ5(中古散文の既存の形容詞と新出の形容詞とを対比したもの)においても、『宇津保』「源氏」

『寝覚』『狭衣』『とりかへ』の五作品では他の作品に比べて新出の形容詞の割合が随分高かった。これは、注7(前稿⑥)で見たとように、新出の形容詞のおよそ半数以上が「動詞(連用形) + 形容詞」「名詞 + 形容詞」等の複合形容詞(第二次形容詞)であるという事情があり、これについてもまた、複合語の量的特性を含めて捉えるべきであろう。